



清流四万十川のシンボル「岩間沈下橋」のV字崩壊から復活までの取組み インフラメンテナンス大賞（国土交通大臣賞）の受賞

森 山 崇・山 崎 剛

四国最長 196km を誇る四万十川は、流域が国の「重要文化的景観」として選定され、その構成要素として沈下橋が大自然に溶け込む風景が広がる。四万十川に架けられている沈下橋のうちで、全体の風景が最も美しいと言われている岩間沈下橋は、2017年11月に橋脚が沈下し路面がV字に陥没した。早期復旧を望む地域住民やサポーターから寄付金等を募り、メンテナンス事業に活用した。また、地域住民が主体となり、交流活動拠点「岩間四万十茶屋」を整備、川とともに生きる文化の継承と景観や環境を守る活動を行っている。

本稿では、岩間沈下橋の沈下発生から3年5カ月ぶりに全面開通に至るまでの橋梁メンテナンスの取組みについて報告する。

キーワード：沈下橋、メンテナンス、景観保全、義援金、ふるさと納税、交流拠点整備

1. はじめに

「日本最後の清流」と呼ばれる四万十川を財産に生きてきた四万十市は、川と人との近い暮らしがある独特の地域であるとともに、環境社会のなかで大きな責任を担っている。四万十川の代名詞である沈下橋は、地域住民の日常に欠かすことのできない生活道路であるとともに、文化的景観の重要な構成要素となり、沈下橋が大自然に溶け込む美しい風景を一目見ようと多くの観光客が訪れる貴重な観光資源となっている。

岩間沈下橋は、観光スポットとして最も人気の高い沈下橋だが、度重なる洪水の損傷により2017年11月に橋の一部がV字に崩壊した（写真—1）。地域住民の生活といつまでも変わらない自然風景を守るため、1日も早い復旧が求められた。復旧にあたっては、岩間沈下橋のメンテナンスを支える活動として、全国からの寄付金やふるさと納税を募り、沈下橋のメンテナンス費用に充てることでインフラ機能の維持に繋げて

いる。また、景観に配慮した復旧工法の採用、地域が主体となった交流拠点・観光施設の整備、地域協働での維持管理体制の構築、沈下橋の現状やメンテナンスの取組みに係る情報発信など、本市として注力してきたインフラ機能の維持に貢献する活動を報告する。

2. 岩間沈下橋の概要

岩間沈下橋（正式名：岩間大橋）は、高知県四万十市の四万十川上流に架かる9つの沈下橋の1つである。台風や大雨で増水することの多い四万十川において、増水時に水面下に沈むように設計された橋梁で、欄干を設けず流水の抵抗を受けにくくしているのが特徴である。

場 所：高知県四万十市西土佐岩間

施 設：市道岩間茅生（かよう）線 岩間大橋（岩間沈下橋）

橋 長：L=120.0 m（10 径間）

幅 員：W=3.5 m

上部工形式：プレテンション方式 PC 単純床版橋

下部工形式：鋼管パイルベント橋脚（突出式）

架設年：昭和 41 年（1966 年）

設計荷重：TL-6 相当

《経 過》

2017. 11 月 橋脚の沈下発生【全面通行止め】
水中部の緊急調査



写真—1 身近で貴重な資源の崩壊

2018. 03 月～ 緊急応急対策の実施
 2018. 04 月～ 補修設計、関係機関協議
 2019. 11 月～ 撤去および補修工事開始
 2020. 03 月 新たに橋脚の沈下発生
 2020. 05 月 橋脚の応急対策完成
 ～ 2021.04 月末 すべての工事完了【全面開通】

3. 復旧費と継続的な維持費の確保

重要な生活インフラかつ観光資源である岩間沈下橋の早期復旧には、復旧費と継続的な維持費の財源確保が必要であるとともに、地域住民の想いや景観の保全を取り組みに反映するなど重要な課題があった。重要文化的景観活用計画検討会での専門家の意見を踏まえ、景観に配慮した復旧工法（極低周波渦電流検査：水中でも高速で板厚計測ができる、鋼製当て板工法：近景でも橋脚の補修跡が目立たない等）が検討された（写真－2～5）。

V字に崩壊した橋を市長が支える画像とともに沈下橋のメンテナンスを支えるモデル的取り組みとして積極的に情報発信したことで、地域や全国の様々な分野のサポーター獲得に繋がった（写真－6）。

地元商工会（経済団体）では、早期復旧を祈念したチャリティーTシャツとタオルを販売する活動を通



写真－2 重要文化的景観活用計画検討会における文化や景観を保全する最適工法の検討



写真－3 鋼製当て板工法の採用



写真－4 全ての橋脚を調査



写真－5 併せて断面欠損部はグラウトを注入し応急対策

四万十川の沈下橋が...！ 早期復旧を目指して皆様からのご支援・応援をお願いします！！



写真－6 寄付金、ふるさと納税を全国へ募集



写真－7 チャリティーグッズの販売

じて、早期復旧を望む地域住民やサポーターからの支援を募り、売り上げの一部がメンテナンス事業に活用された（写真－7）。また、NHK 紅白歌合戦の出演経験を持つ高知県出身の演歌歌手・三山ひろし氏（本市観光大使）に支援活動の広告塔となって頂いたこと

で、ファンの募金・支援金，サポーターとなって頂いた企業・団体，個人からの寄付金やふるさと納税が全国から集まり，更なる財源確保に繋がった。

4. 交流拠点を整備し，沈下橋の現状やインフラメンテナンスの必要性を広く発信

中山間地域である岩間沈下橋周辺では，沈下橋や四万十川観光といった地理的好条件を活かした地域づくりを住民自ら進めるため，地域住民が主体となり，四万十川と岩間沈下橋の風景が一番に展望できる空間整備を行ったことで，国道441号沿いの新たな観光名所となっている。今では岩間沈下橋を見下ろせる休憩施設として，地域の交流拠点となる「岩間四万十茶屋」，観光シーズンにも対応可能な「駐車場」，沈下橋を復旧する際に再利用した「床板ベンチ」，高知県出身の演歌歌手・三山ひろし氏の楽曲『四万十川』の「歌碑」と「演奏装置」などが整備された（写真—8,9）。

これら交流拠点においては，生涯学習として四万十川や岩間沈下橋の現状や四万十川の観光情報を積極的に発信すること，また，三山ひろし氏が歌う『四万十

川』の「歌碑」や「演奏装置」を設置し多くの方にPRすることで，沈下橋のインフラメンテナンスの必要性を広報する役割を担っている。今後，「岩間四万十茶屋」を拠点にメンテナンスを踏まえた沈下橋の変遷について，ガイド講習を実施し住民自らが来訪者に説明できるような仕組みづくりなど，地域とともに継続した取り組みを進めていく予定である。

5. 新たな維持管理体制の構築

沈下橋の復旧を機に5年に1回の定期点検のなかで，独自に橋脚等の水中調査の義務付けを行った。また，今回のメンテナンス事業を通じて，地域住民と日頃の維持管理における重要性を共有できたことにより，地域住民や「岩間四万十茶屋」に常駐する管理人などが，日常生活の中で沈下橋を確認し，些細な異常でも道路管理者（市産業建設課）へ報告して頂くなど，橋の現状を迅速かつ適正に把握することが可能になった（写真—10）。今後も，このような取り組みを継続し，多様な主体による維持管理体制の構築に努めていく所存である。



写真—8 景観を活かしたふるさと継承の拠点づくり



写真—10 交流・情報発信拠点 岩間四万十茶屋



写真—9 「四万十川」歌碑，演奏装置を設置

6. 景観地域づくり分野への波及

2020年10月に本市で開催された全国景観会議全体研修会（国土交通省及び地方整備局ほか都道府県より景観地域づくり分野の約80名の実務担当者が参加）において，沈下橋の景観に配慮した復旧工法の採用や橋梁メンテナンスを支える活動を景観地域づくり分野における好事例として紹介させて頂いた（写真—11）。



写真—11 全国景観会議全体研修

7. インフラメンテナンス大賞への応募

沈下橋の早期復旧に対する地域の思い及びメンテナンスを支える活動を全国に届けるべく、インフラメンテナンス対象への応募を行った。令和3年度で5回目となる今回、メンテナンス実施現場における工夫、メンテナンスを支える活動、技術開発の3部門で247件の応募があり、各大臣賞、特別賞、優秀賞の33件が決定した。このうち、岩間沈下橋の本取組みが、メンテナンスを支える活動部門で国土交通大臣賞を受賞した。四万十川の景観に配慮した復旧工法を選定するなどの工夫を行った点、行政だけでなくこの橋を愛する地域と全国サポーターが一丸となり、市民活動や人材育成等のインフラ機能の維持に貢献した点などを評価して頂いた（写真—12）。



写真—12 第5回インフラメンテナンス大賞の表彰式

8. おわりに

復旧が完了した岩間沈下橋が2021年4月29日より3年5か月ぶりに全面開通となった。この日を待ち望んでいた関係者の皆さまには、早期復旧にかける思いとともに、多大なご支援を頂き、心から感謝申し上げます。

「地域の生活道としての機能を確保すること」、「昔から変わらない、沈下橋が四万十川の大自然に溶け込む美しい風景を守ること」、「川とともに生きるまちとして歴史と文化を継承すること」を使命に、今後も貴重な財産、皆さまから愛される沈下橋として、後世に残す活動に取り組んでいく所存であり、引き続きのご支援、ご協力をお願いします。



写真—13 地域や全国サポーターの思いを乗せた事業が完了

JICMA

【筆者紹介】

森山 崇（もりやま しゅう）
四万十市
副市長



山崎 剛（やまさき たけし）
四万十市
西土佐総合支所・産業建設課
管理土木係長

